

## シヴァ教について

インダス文明末期の紀元前1900年から紀元前1300年ごろに、インダス川流域からの植民者がガンジス川とヤムナー川の地方（ドアブ）に住みついた。やがてインダス文明が崩壊すると、インドの文明の中心はインダス川流域からガンジス川流域へと移動した。そして、紀元前1000年ごろに先住のドラヴィダ人にかわってアーリア人がガンジス川流域に住み着いたのである。しかし、ガンジス川を中心とするインドの文明は、ローカルな文明にとどまり、世界の文明にはなり得なかった。世界文明として、メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明（インド・パキスタン文明）、ギリシア文明、ヘレニズム文明、ローマ文明、ヨーロッパ文明（西欧文明）、イスラム文明、中国文明（黄河文明、長江文明、遼河文明）、アンデス文明などの名がよく挙げられるが、インド文明とかガンジス文明という言葉はあまり耳にしない。文明の重要な要素に宗教があるが、釈迦による仏教はガンジス川流域で生まれた。だとすれば、ガンジス文明という言葉があっても良さそうなのに、ガンジス文明という言葉は一般的でない。したがって、文明論的にいえば、仏教の生まれたガンジス川流域は、インダス文明から中国文明への架け橋、中継地域という事ができるのでないか。私は、仏教というものを理解する上で、法華経というものを理解する上で、このような文明論的な視点が必要であると思う。そのような文明論的な視点で法華経を見た時、シヴァ教という宗教は、世界最古で、[かつて私が世界最強の宗教と呼んだ事もある宗教](#)であるが、後ほど述べるように、釈迦の最後の説法会場（霊鷲山）に出てくる。釈迦の意識としては、それを取り込んだというかそれを超えた。その事の意味は実に大きい。したがって、法華経を理解する上で、是非ともシヴァ教を理解しておいていただきたい。

では、以下において、シヴァ教についてはいろいろと勉強する事としたい。

シヴァは、「カイラス山」のあたりに住んでいたと伝えられている。したがって、シヴァ教はこの「カイラス山」を中心として各地に広がっていったと言ってよい。カイラス山は、インド側からいえばプラマプト側の源流、パキスタン側からいえばインダス文明の源流にある標高6656mの聖山である。聖山であるために今でも登山の許可が下りない。現在、「カイラス山」は、ヒンドゥー教、ジャイナ教、チベット仏教、ボン教の聖地として多くの巡礼者を集めているが、もともとはシヴァ教の信仰の山となったものであり、「カイラス山」はシヴァ教の生みの母であり、育ての母であると言って良いかもしれない。

まず、その位置から見てみよう。



( <http://www.ne.jp/asahi/rirun/himal/tibet/kailash/> より)

カイルス山はチベットにある。上の図の右端にある「ラサ」はチベットの古来首都であった都市である。チベット仏教の巡礼者はラサから、シガツェからラツェに入りカイルスに向かうのである。ヒンズー教の巡礼者や日本人などの観光客は、ネパールのカトマンズからエベレスト（8848m）とシシヤパン（8012m）の間の峠を越えて、マサガに入りカイルスに向かう。

かつて三蔵法師（玄奘）は、ガンダーラからカシミールに入り、カイルス山の方に向かわずにナーダム大学のあるナーダムに向かっている。多分、ほぼガンジス川に沿った道を通って行ったのであろう。古来、河川というのは舟運によって人や物資が運ばれたので、その沿川には集落が発達した。集落が発達すれば、その周辺の陸路も自然にできて行ったと思われる。したがって、インダス文明のインドへの伝播経路は三蔵法師が通ったような経路、煎じ詰めて言えばガンジス川と言っても良い。

東南アジアとの交流もガンジス川の舟運が中心であったと思われるので、マダラ国の興隆を考える時、ガンジス川の舟運を視野に入れておかなければならない。もちろん大河川の沿川には肥沃な土地も発達するので、当然それも経済発展の基盤を形成する。マダラ国が栄えた経済基盤はガンジス川にある。



( [http://todaibussei.or.jp/asahi\\_buddhism/12.html](http://todaibussei.or.jp/asahi_buddhism/12.html) より)

マダラ国興隆の基盤として考えておかなければならないものに、経済的基盤のほかに文化的基盤があると思う。世界最古の宗教と言われるシヴァ教のことである。古来、宗教というものは、単に信仰に限らず、あらゆる技術の面でも大きな役割を果たしてきた。僧というのは知恵に長けた人であり、あらゆる知識を吸収して、技術面でも大きな役割を果たしてきたのである。そういう意味で、宗教的基盤という時、そのなかに技術を含んだものであるとお考えいただきたい。宗教的基盤は文化的基盤そのものである。

シヴァ教の聖地・カイラス山は、インド側から行くとすれば、マダラ国からネパールを経て行くのが最も近い。そういう点で、マダラ国は文化的基盤にも恵まれた「場所」であると言えるのではなからうか。



チベット仏教、ボン教、ジャイナ教、ヒンズー教の聖地

## カイルス山

それでは、現在、カイルス巡礼がどのように行われているのか、その様子をYouTubeで見たい。

聖地カイルス（チベット仏教の祭り）

<http://www.youtube.com/watch?v=trp6HJk750Q>

カイルス巡礼（仏教徒も五体倒地を）

<http://www.youtube.com/watch?v=CmJkW7xOTpI>

ベナレス・ヒンドゥー大学教授のアラン・ダニエールという人の書いた「シヴァとディオニュソス・・・自然とエロスの宗教」（2008年5月、講談社）という名著がある。シヴァ教を勉強する上で書く事のできない本である。その本で、アラン・ダニエールがシヴァ教の文明論的説明をしているので、それを次に紹介しておきたい。彼は、次のように説明している。すなわち、

『 新石器時代および旧青銅器時代の初期に、動物の主パールヴァティーと山の神パシュパティへの崇拝がドラヴィダ系の侵略者の間で確立された。（岩井國臣のコメント：ドラヴィダ人は古代からインドに定住していたと考えられる古モンゴリアンである。トラヴィダ人は現在では主に南インドを中心として居住し、マレーシアやシンガポール、マダガスカルなどにも居住している。ドラヴィダ人はアーリア人とは外見が異なり、アーリア人よりも一般的に肌の色が黒く背が低い手足が長い、ウェーブがかった髪などの特徴があり、DNAの観点からは古モンゴロイドに分類される。古モンゴロイドは、最初の日本人と同じ人種で、オーストラリアのアボリジニやパプアニューギニアの人々、スリランカのヴェッダ族とも同じである。アラン・ダニエルはドラヴィダ系の侵略者と言っているが、ドラヴィダ人が住み始めた以前にも現生人類のホモ・サピエンスがいたとしているが、古モンゴリアンは相当高度な文化を持っており、文明論的には、トラヴィダ人が最初のインド人であると考えて良い。）トラヴィダ人は、シヴァ教の名の下にアニミズムと重なる非常に大きな哲学的・宗教的な運動を巻き起こし、後の時代の宗教が導きだされる源泉となった。』

『 歴史上のシヴァ教は、紀元前6000年のおわりに、パシュパティ信仰とムルガン信仰の融合の結果として体系化され、世界全体の宗教的渴望を満たすものとなった。ムルガンはシヴァの息子となった。ムルガンはスカンダ（射精）とも呼ばれる。この二つの信仰は、後の時代の宗教形態において緊密にからまりあうこととなる。別の地ではディオニユソスと呼ばれる。パシュパティは山の女神の夫であるケレタ神に対応する。』

『 もうひとつ、非常に長い歴史を持つ宗教が、ジャイナ教である。（岩井國臣のコメント：ジャイナ教とは「ジナの教え」という意味だが、それが確立したのは釈迦の時代である。「ジナの教え」そのものは、自由を愛する思想が基（もと）になっているが、そういう自由な思想というものは未熟ながらも釈迦の時代よりもっと古い時代から広まっていた、その時代時代の指導者は「ジナ」と呼ばれた。その「ジナの教え」が釈迦の時代にマハーヴィーラによってジャイナ教として結実したものであるが、「ジナ」としてはマハーヴィーラは12代目に当たる。ジャイナ教の始祖・マハーヴィーラは、マガダ国の人である。30年間遊行しながら教えを説き広め、信者を獲得し、72歳で現在ビハール州の州都であるパトナで生涯を閉じた。マハーヴィーラは釈迦在世時代の代表的な自由思想家である。）ジャイナ教は、来世において人や動物の姿で存在が進化するという、輪廻転生を信じるピューリタンの宗教である。絶対的な無神論ではないが、ジャイナ教は人間と超自然界との接触可能性を認めない。ジャイナ教によれば、人間は創造の原理、神というものが実在するか否かを確実に知ることはできないので、そんなことに気をもむ必要はない、と説く。儀礼的というより道徳的なこの宗教は、殺生の禁止、厳格な菜食主義、質素な生活を信者に強く要求する。原始仏教は、このジャイナ教を作り替えたものであった。ジャイナ教の始祖・マハーヴィーラは、釈迦の同時代人として好敵手でもあった。仏教ジャイナ教も世界の隅々まで伝道師を派遣した。こうした裸の苦行者たちはギリシャにも絶大な影響を与え、その痕跡はある種の哲学学派やオルフェウス教に認められる。後のヒンドゥー教はジャイナ教から、もともとはシヴァ教にもヴェーダ教にも存在しなかった輪廻

転生と菜食主義の論理を取り入れることとなった。（岩井國臣のコメント：アラン・ダニエルはバラモン教をアーリア人の宗教と呼んでみたりヴェーダ教と呼んでみたりしているので紛らわしい。それぞれ厳密には、その時々<sup>の</sup>歴史的背景を含んだ呼び方になっているので、少し異なるニュアンスを含んでいるが、紛らわしいので、私は、すべてバラモン教という呼び名に統一してインドの宗教の説明をする事としたい。ヴェーダとは、元々「知識」の意であり、紀元前1000年頃から紀元前500年頃にかけてインドで編纂された一連の宗教文書の総称だが、もともとはバラモン教の聖典として誕生したものである。そのもともとのバラモン教の聖典は、その後多くの宗教家に影響を与え、いろんなヴェーダが書かれた。つまり、ヴェーダはバラモン教の聖典として誕生し、多くの宗教家の手によって書籍として進化をして行ったのである。ヴェーダは、長い年月をかけて口述されや議論されてきたものが、後世になって書き留められ、記録されたものである。バラモン教を起源として後世成立したこのヴェーダの宗教群をヴェーダ教と呼ぶ事もでき、バラモン教だけでなくそれらの宗教群を含んで、アラン・ダニエルはヴェーダ教と呼んでいるのである。）』

『 さらにその後、アーリア人の侵略者とともに、中央アジアの遊牧民族が信仰する一大宗教がインド並びに西欧世界の全域を圧倒した。この宗教の神は、実質的には自然現象そのもので、人間の徳性を擬人化した存在でもあった。インドラは雷の神、ヴァルナは水の神、アグニは火の神、ヴァーユは風の神、スリヤは太陽の神、ディヤウスは宇宙の神、そしてミトラは連帯を、アリヤマンは名誉を、バーガは財の共有をあらわす。ルドラは破壊者、時間、死の原理。かれはのちにシヴァと同一視されることとなる。供犠（サクリファイス）という手段で自然の諸力をなだめようとはするが、アーリア人の宗教は自然宗教ではない。それは、おのれの身の安全と支配権を確保するためだけに神の助力を乞う、人間中心主義的な宗教である。（岩井國臣のコメント：中央アジアの遊牧民族が信仰する自然現象に関わる神々は、シヴァ教に習合され、シヴァ教はそれによって「宇宙の生成原理」を表象する世界最強の宗教に進化していくのである。）』

『 第二千年期から、シヴァ教は徐々にアーリア人のヴェーダ宗教に呑み込まれ、それは一方で後のヒンドゥー教を形成し、他方でミケーネとギリシャの宗教を形成した。しかしながら、シヴァ教はこのような融合に抵抗し、インドでは古代的な形態を保ったまま何度も復活した。』

『 これら四つの主たる宗教思考の潮流（アニミズム、シヴァ教、アーリア人の宗教、ジャイナ教）は、後の時代のキリスト教がそうしたように、土着の神・伝説・信仰と結びつきながら世界中に広まった。それらの潮流は、ほとんどすべての現存する宗教形態の基層となっている。ヘブライの古い多神教から派生したセム人の宗教、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラム教もそこに基盤を置いている。』

『アーリア人民族到来以来以前の民衆の神であるシヴァは、その民衆がアーリア人の侵略によって支配された世界で隷属状態に置かれ、職人のカーストに貶められた後も、依然として民衆に敬愛される神であり続けた。』

『シヴァは下層の者の神であり、ゆえにその教えは全人類に向けられる。』

『今日でも、重要なシヴァ崇拝の聖域では、アーリア人のバラモン僧とスードラの祭司が代わる代わる儀式を執り行う。つまり、非アーリア人系の祭司職は何世紀もの間、アーリア人の侵略から4000年がたってもしぶとく生き延びてきたのである。』

『シヴァは宇宙の支配者である。その多様な姿は、宇宙の方角を支配する神々に結びつき、それぞれの神には、生命に対する直接的な影響力と重要なシンボリズムが付与されている。(中略)さまざまな儀礼に関して言えば、参列者の立つ方角がいかに重視されるか判る。方角の決定は、都市計画の場合と同様に、それが聖域や寺院であれ、個人の家であれ、いかなる建造物をつくるときも厳格に考慮されなければならない。』

『この世界に生まれたものは、いつかは死ぬ。したがって生の原理は時間に結びつき、最終的には死の原理に結びつけられる。創造の神は、同時に破壊の神でもある。生は死を育む。いかなる生命体もほかの生物の命を破壊し貪り食うことなしに、生き延びることはできない。それゆえシヴァは恐ろしい相貌(バーイラヴァ)ももっている。』・・・と。

以上、バラモン教がより民衆に近い土俗的な宗教へと変容していった背景をシヴァ教を中心にみてきた。その後インドでは、シヴァ神とヴィシュヌ神という性質の異なる二大神への帰依が強まり、現在のヒンドゥー教が出来上がっていく。

ヒンドゥー教はいわゆる民族宗教で、特定の教祖や教団といった統一組織はない。ヒンドゥー教は膨大な数の神々を崇拝する典型的な多神教だが、その中でも神学上特に重要な神として、宇宙の創造神「ブラフマー」、世界秩序の維持神「ヴィシュヌ」、破壊と混沌の神「シヴァ」を三最高神としている。

ブラフマー神は、実際の宗教生活の中で礼拝の対象になったり、その崇拝を中心とする宗派が生まれることはなかったが、他の二神の場合は、バラモン教からヒンドゥー教への変容の過程において、徐々にその地位を高め、最高主宰神としてあがめられるようになっていったのである。

ヒンドゥー教においてはヴィシュヌ派やシヴァ派以外にも、シヴァの妃ドゥルガー女神とその性力(シャクティ)を崇拝するシャクティ派などもあるが、ヴィシュヌ派、シヴァ派がヒンドゥー教徒の大半を占めている。この両派は、互いの神を自分の神より下に見ることはあっても、決して排除しようとはしないので、両派間の宗教的争いといったものは起

らなかった。このような特徴は、まさにヒンドゥー教的な、包括的性格を表しているといえる。

ヒンドゥー教では、解脱（げだつ）へ三つの道、つまり知識（ジャニヤーナ）の道、宗教的義務を遂行する行為（カルマ）の道、そして信愛（バクティ）の道を説いているが、これは両者に共通のヒンドゥー教の一大特徴だ。。

このうち神へのバクティ（信愛）が、ヒンドゥー教全体の信仰の質を大きく変えるキーワードとなっていった。バクティとは、もともと夫と妻のような、契約や約束によらない人間同士の信愛を示した言葉であり、これを神との関係にまで拡大し、最高神に帰依すれば最高神の恩寵によって救われるとしたのが、中世以降に興ったバクティ運動である。このバクティ運動はヒンドゥー教の主流となり、その主たる担い手になったのが、ヴィシュヌ派の信徒達であった。

ヴィシュヌ神は、「温和」と「慈愛」の神である。元来は太陽神で、全宇宙（天界）を三歩で歩いたといわれている。そして各地域で親しまれ、尊敬を受けていた10の神々を、己の化身として取り込むことで、その信徒数を増やしていった。その中で最も有名なヴィシュヌの化身が、「クリシュナ」である。

ちなみにブッダもその化身の一つある。ヒンドゥー教でブッダは、ヴィシュヌの化身の一つとしてとして挙げられている。そしてブッダガヤ等の仏蹟も、ヒンドゥー教徒の巡礼地に加えられているのである。

ヴィシュヌは、かくも寛容な宗教だ。すばらしい!!!

この慈愛の神ヴィシュヌに対し、シヴァ神は荒ぶる神であり、破壊神といわれ、破壊・死と創造・生殖を同時につかさどるヒンドゥー教の主要神格です。そしてリング(抽象化された男性性器)が、シヴァの象徴とされている。シヴァ派はシヴァを最高神とした信仰のグループで、苦行、呪術、祭礼、踊り等を特色とし、比較的社会の下層階級に浸透していった。シヴァは非アーリア人の神であり、バラモン達は最初はその礼拝に反対していたが、次第に信仰されるようになっていった。

12世紀には、新たに分派として、ヴィーラ・シヴァ派が登場した。同派はリングを身に着けたことから、リンガーヤト派とも呼ばれました。今日多くのヒンドゥー寺院では、このリングがヨーニ（女陰をかたどったもの）の上に立ったものを本尊として祀っている。インドス文明にまでさかのぼる性器崇拜と結びついたシヴァ神への帰依は、まさにインドの精神風土の最深層部に根ざす、信仰の有り様といえるようである。

現在インドでは、ヴィシュヌ派の信徒数はシヴァ派のそれを上回っています。



ヴィシュヌは、ヒンドゥー教の神である。仏教名は「毘紐天」、「韋紐天」、あるいは「那羅延天」。音写語としては「微瑟紐」、「毘瑟怒」などもある。これらは迦楼羅天（かるらてん）とは違うが、まあ、仏教というのは、いろんな霊的存在がいて、ややこしいというか訳が解りませんね。迦楼羅天（かるらてん）とは、インド神話のガルダを前身とする八部衆、後には二十八部衆となった。「かるら」はパーリ語に由来。迦楼羅王とも呼ばれる。食吐悲苦鳥（じきとひくしょう）と漢訳される。インド神話の神鳥ガルダが仏教に取り込まれ、仏法守護の神となったのである。口から金の火を吹き、赤い翼を広げると336万里にも達するとされる。一般的には、鳥頭人身の二臂と四臂があり、龍や蛇を踏みつけている姿の像容もある。鳥頭人身有翼で、箏や横笛を吹く姿もある。また那羅延天の乗り物として背に乗せた姿で描かれる。これは前身のガルダが那羅延天の前身ヴィシュヌ神の乗り物であった事に由来する。

仏教において、毒蛇は雨風を起こす悪龍とされ、煩惱の象徴といわれる為、龍（毒蛇）を常食としている迦楼羅天は、毒蛇から人を守り、龍蛇を喰らうように衆生の煩惱（三毒）を喰らう霊鳥として信仰されている。密教では、迦楼羅を本尊とした修法で降魔、病除、延命、防蛇毒に効果があるとする。また、祈雨、止風雨の御利益があるとされる。

仏教には霊的存在として数々の神が存在する事はきわめて大事なところであり、それは釈迦が靈鷲山で最後の説教を行ったその教え「法華経」に源があるようだ。

